

平安宮左馬寮・御井・豊楽院跡

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安宮左馬寮・御井・豊楽院跡

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しております。また、平安京遷都以来今日に至るまで都市として永々と生活が営まれてきており、各時代の生活跡が連綿と重なり合っています。都であるゆえに、そこから発見されるその一つ一つは、日本の歴史を語るうえで欠くことのできないものとなっています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした遺跡の発掘調査を通して京都の歴史の解明に取り組んでおります。その成果を市民の皆様に広く公開し活用いただけるよう進めていくことが研究所の責務と考えております。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、出土遺物の小・中学校や公的施設での貸出展示、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところであります。

さて、当研究所では従来各年度毎で報告してまいりました「京都市埋蔵文化財調査概要」を改め、平成13年度調査分より各調査箇所毎に1冊の報告書として発刊しております。その第5冊目として、このたび山陰線側道北線新設工事に伴います平安宮跡の発掘調査の成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援をたまわりました関係者各位に対して、厚くお礼ならびに感謝を申し上げます次第です。

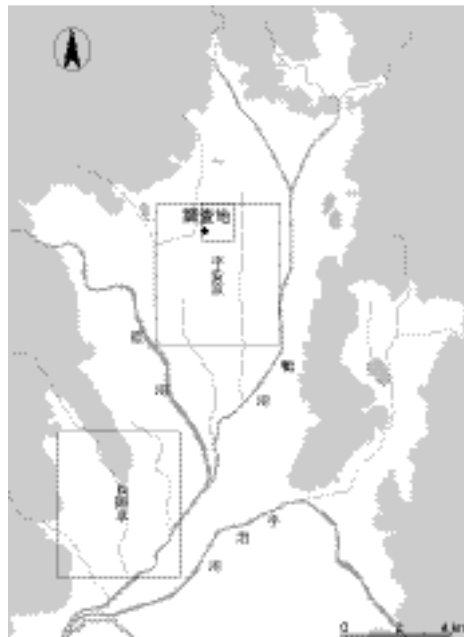
平成14年9月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安宮左馬寮・御井・豊楽院跡
- 2 調査所在地 京都市中京区西ノ京左馬寮町6-24他地内
- 3 委託者及び承諾者 京都市
- 4 調査期間 発掘調査 2001年6月18日～2001年7月26日
立会調査 2001年10月19日～2001年10月26日
- 5 調査面積 約132.5m²（発掘調査） 約86m²（立会調査）
- 6 調査担当職員 辻 裕司
- 7 使用地図 京都市長の承認を得て、同市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）
「聚楽廻」を複製して調整した。
- 8 使用方位・座標値 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度（座標および標高は、京都市遺跡測量基準点を使用した）
- 10 遺構番号 調査区ごと、遺構種類ごとに通し番号を付した。
- 11 遺物番号 挿図の土器類・木製品の順に通し番号を付した。
- 12 掲載写真 村井伸也・幸明綾子・調査担当職員（立会調査）
- 13 作成担当職員 辻 裕司
（調査地点図）



目 次

1 . 調査経過	1
(1) 発掘調査	1
(2) 立会調査	2
2 . 遺跡の環境と周辺の調査	2
3 . 遺 構	3
(1) 発掘調査	3
1 区	3
2 区	3
3 区	5
4 区	6
(2) 立会調査	7
4 . 遺 物	8
5 . ま と め	9

図 版 目 次

図版 1 遺構	1	1 区全景 (西から)
	2	2 区西半全景 (西から)
	3	2 区東半全景 (西から)
図版 2 遺構	1	3 区全景 (西から)
	2	4 区全景 (北西から)
	3	立会調査 土壌 4 検出状況 (北東から)
	4	立会調査 土壌 2 検出状況 (北から)

挿 図 目 次

図 1 調査位置図 (1 : 5,000)	1
図 2 1 区調査前全景	2
図 3 2 区調査風景	2
図 4 1 区実測図 (1 : 100)	3

図5	2区実測図(1:100)	4
図6	3区実測図(1:100)	5
図7	4区実測図(1:100)	6
図8	立会調査遺構検出地点位置図(1:2,500)	7
図9	2区土取穴4出土遺物実測図(1:4)	8

表 目 次

表1	遺構概要表	6
表2	遺物概要表	8

平安宮左馬寮・御井・豊楽院跡

1. 調査経過

調査地点は、京都市中京区西ノ京左馬寮町6-24他地内に所在する。ここに京都市建設局立体交差課による山陰線側道北線新設工事の計画が持ち上がった。この一帯は平安宮跡に該当するため、京都市埋蔵文化財調査センターの指導により、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を実施する運びとなった。調査対象地は御前通から西町通までの間である。また、この間のうち、発掘調査を実施するうえで調査面積の確保が困難な箇所は、立会調査を実施した。

調査対象地は平安宮跡に位置する。平安宮内における想定位置は、南北方向では中央やや南側、東西方向では宮西限から豊楽院跡に該当する。

(1) 発掘調査

発掘調査における調査区は御前通側から1～4区を設定した。1区は西大宮大路東築地想定線のやや東に位置し左馬寮跡に、2区は御井東限築地（皇嘉門大路宮内延長路西築地）想定位置のやや西に位置し御井跡に該当する。3・4区は豊楽院の西側（承観堂跡）からほぼ中央に位置する。このうち、2区は今回の調査区設定予定地の中で最も広く調査区を設定する予定であったが、関西電力の元敷地で、大規模なコンクリート基礎が調査面積のほぼ半分を占め、また、盛土も厚く相対的に遺構面が深くなったことなどから、広い調査面積を確保することができなかった。

発掘調査は2001年6月18日から開始し、2001年7月26日に終了した。

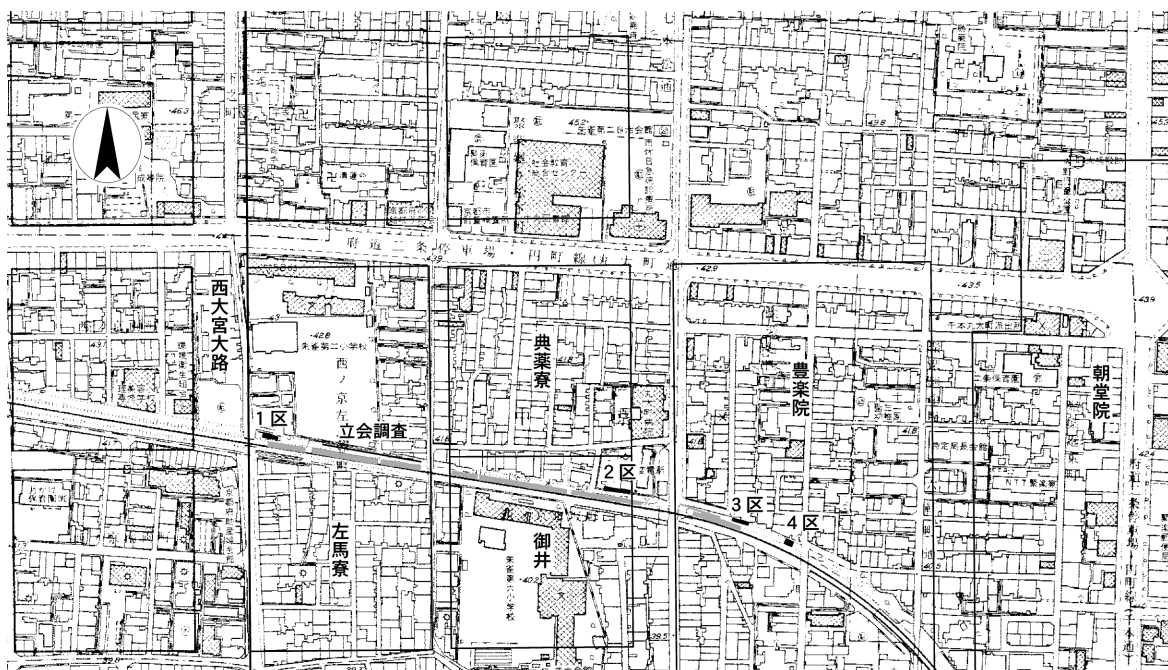


図1 調査位置図(1:5,000)

発掘調査の結果、1区では平安時代に属する土壌・近世以降の土取穴などを、2区では平安時代前期の土壌・土取穴、室町時代後期の柱穴・溝・土壌、近世以降の土取穴などを検出するなどの成果を挙げることができた。また、3区から4区ではほぼ全面にわたって近世以降の土取穴を検出し、平安時代の遺構は皆無であったが、平安時代の瓦などを得ることができた。

(2) 立会調査

御前通から下ノ森通間の京都市立朱雀第二小学校の南側で、埋設管敷設工事に伴い立会調査を実施した。立会調査範囲は、左馬寮跡のほぼ中央部に位置する。

調査は2001年10月19日から開始し、10月26日に終了した。

調査の結果、柱穴・土壌などを検出することができた。

2. 遺跡の環境と周辺の調査

調査地点は平安宮跡南西部に該当する。平安宮の東西中心地域は、船岡山から延長する緩やかな丘陵が南に延び、東西へは丘陵から緩やかに下る。今回の調査で検出した地山面の標高は土取などで削平を受けているが、ほぼ平坦である。平安宮跡にはいわゆる聚楽土と呼ばれる黄色を呈した粘土層が広く分布しており、この聚楽土を対象とした土取りが行われた。今回の調査地点周辺の調査でも江戸時代の土取穴が検出されており、当該地周辺にも広く分布していることが窺われる。

調査地点周辺は、平安宮左馬寮・豊楽院跡に該当し、これまでの調査では、豊楽院正殿である豊楽殿をはじめ、廊・栖霞楼の一部など多くの調査成果が挙げられている¹⁾。左馬寮跡では、土取穴が広範に分布し、顕著な遺構は未検出であるが、平安時代の遺構が検出されている²⁾。

一方、これまでの山陰線複線化や側道に伴う調査³⁾でも多くの成果が挙げられており、山陰線複線化・側道北線に伴う調査では、左馬寮跡で平安時代中期の柱穴(一辺60cm、柱間2.1m・3m)が、御井跡では、室町時代中期の耕作土層が検出されている。豊楽院承観堂推定地の調査では凝灰岩片や瓦を含む土壌4基が検出され、承観堂の礎石据付穴の可能性も想定されている。



図2 1区調査前全景



図3 2区調査風景

3. 遺 構

(1) 発掘調査

発掘調査における調査区は4区にわたるため、各調査区ごとに概要を述べる。各調査区の見出しの凡例は、以下の通りとする。 区(調査区規模・面積・検出地山標高・遺跡名)

1区(13.5×3.6m・約30.5㎡・41.0m・左馬寮跡)

基本的な層序は、現代積土層が厚さ0.1~0.2m堆積し地山となる。地山の上面は、東半ではほぼ平坦であるが、西(御前通)側へは緩やかに傾斜する。地山は黄褐色粘土層が堆積する。

遺構は地山上面で検出した。検出した遺構には土塋がある。土塋は調査区北端の東寄り(土塋1)と南側(土塋2)および西側(土塋3)で検出した。土塋1は西側が削平を受け、北は調査区外へ広がる。現存長50cm・深さ約5cmあり、暗灰黄色泥土層が堆積する。土塋2は大半が削平を受け、現存長60cm・深さ約5cmあり、黒褐色粘土層が堆積する。土塋1・2とも平安時代と考えられる土師器の細片が出土した。土塋3は中央部で検出した。南は削平を受け、北は調査区外へ広がる。現存長280cm・深さ約40cmあり、灰黄色砂泥層が堆積する。平安時代中期の土器類および瓦が出土した。

2区(17.5×2.8m・約49㎡・41.1m・御井跡)

基本的な層序は、現代積土層が厚さ約0.9m、耕作土層(オリーブ黒色砂泥・黒褐色砂泥)が厚さ0.17m堆積する。西半の耕作土層下は、室町時代の整地土層(黒褐色泥砂)が厚さ約0.15m堆積し、地山となる。地山は、上から黒色砂泥層・灰褐色粘土層・黄褐色粘土層が堆積する。東半の耕作土層下は、江戸時代の土取穴(黄灰色泥砂層が約20cm、オリーブ黒色砂泥層が約20cm)上

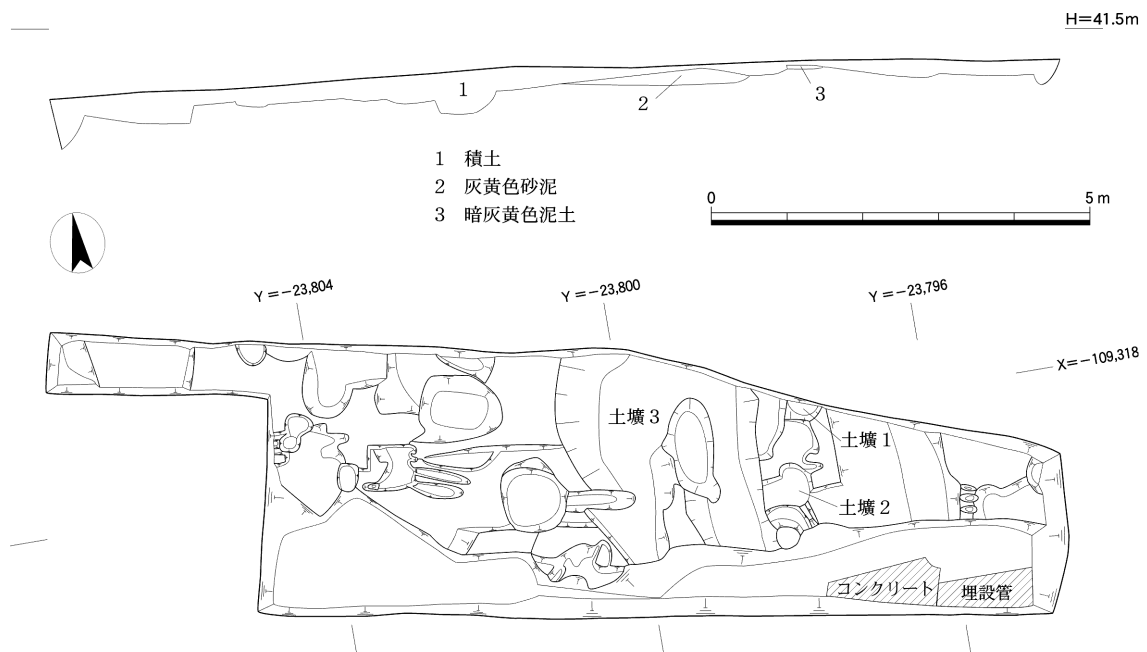


図4 1区実測図(1:100)

面となる。地山は上から黄褐色粘土層・灰オリーブ粘土層・緑灰色微砂層が堆積し、黄褐色粘土層・灰オリーブ粘土層が土取の対象となった土層であろう。検出した遺構は2区を東半・西半に分けて概要を示す。

西半では平安時代前期の土壙（土壙1）・室町時代の整地土層・溝（溝1・2）・柱穴（柱穴1）・江戸時代の土取穴などがある。

土壙1は、調査区西端に位置し、室町時代の整地土層下で検出した。南は攪乱を受け、西・北は調査区外へ広がる。現存長125cm・深さ約40cmあり、黒褐色砂泥層・黒色砂泥層が堆積する。平安時代前期（京都 期^{4）}の土師器・黒色土器・瓦が出土した。室町時代の整地土層は、黒褐色泥砂層で室町時代後期（京都 ~ 期）と考えられる土師器小片が出土した。柱穴1は南半が攪乱を受けており、現存径35cm・深さ45cmある。室町時代後期（京都 期）と考えられる土師器小片が出土した。溝は南北方向のものを室町時代の整地土層の上面と下面で2条検出した。溝1はほぼ柱穴と重なる位置にあり、現存幅37cm・深さ45cmある。平安時代の瓦が出土した。溝2は現存幅18cm・深さ8cmある。遺物は出土していない。江戸時代の土取穴は、西半の東部から東半にかけて検出した。暗褐色砂泥層・黒褐色泥土層・黄灰色泥砂層・オリーブ黒色砂泥層などが40~60cm堆積する。底面は下層の土取穴上面にあり、作業を行ったものの、下層には前

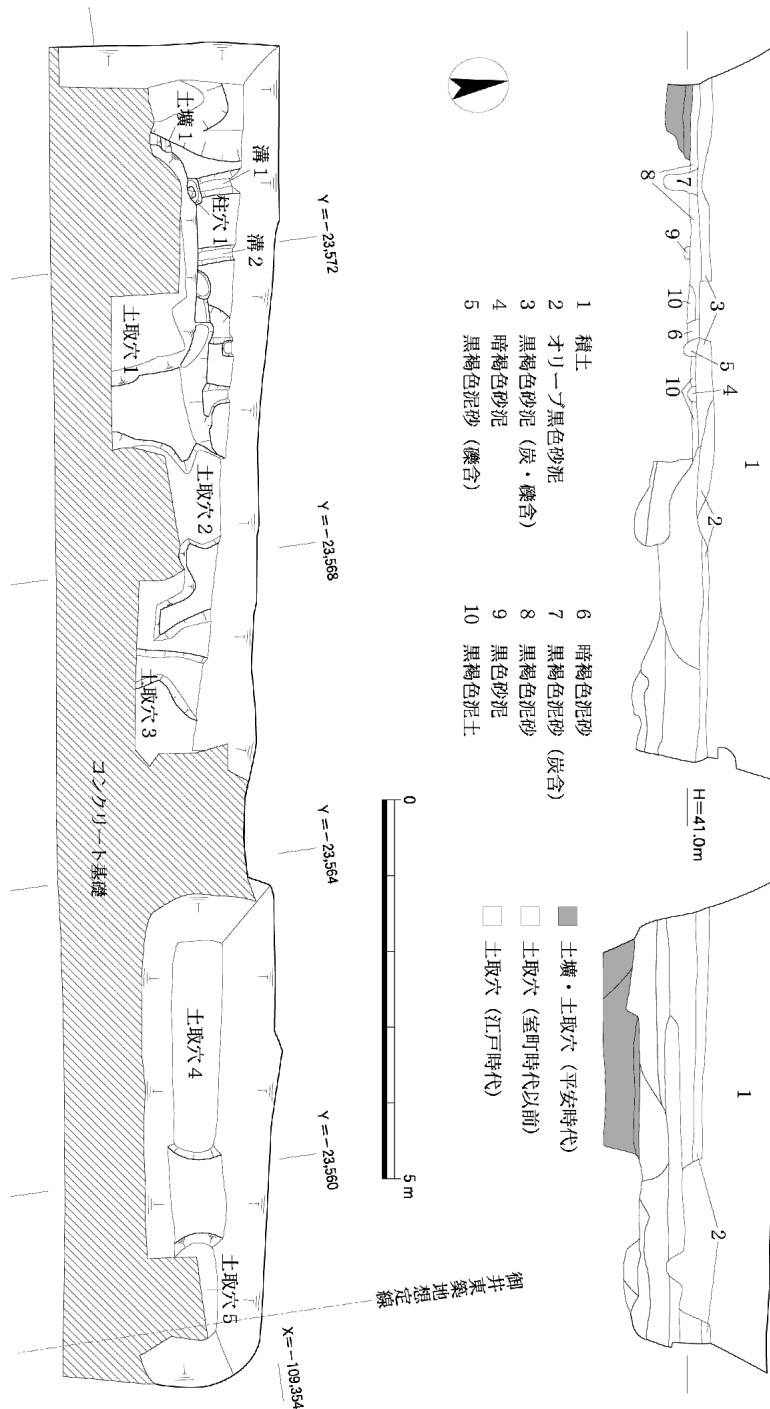


図5 2区実測図（1：100）

代の土取穴があったため、対象となる土層が採取できず途中で中止した可能性もある。江戸時代の土器類、平安時代の土器・瓦類が出土した。さらに下層で検出した土取穴と考えられる遺構（土取穴1～3）は、それぞれ形状はまちまちで連続性はない。土取穴1～3には、地山の黄灰色砂泥層を含んだ黒褐色砂泥層・黒色砂泥層などが堆積する。検出面からの深さは、40～70cmある。出土遺物は細片であるが、平安時代と考えられる土師器・瓦などが出土した。また、土取穴1からは平安時代後期の白磁壺片が出土した。

東半で検出した遺構には、土取穴と考えられる遺構（土取穴4・5）がある。室町時代以前とした土取穴は、土取穴5上面で平安時代前期の土器とともに僅かに室町時代後期の土師器片が出土したことから区別した。土取穴5上面で凝灰岩の破片が2個出土している。堆積土は上半が黒色砂泥（褐色砂泥や炭含む）層、下層（土取穴5）はオリーブ黒色・灰オリーブ色粘土層が堆積する。土取穴4は2区東半の西端で立ち上がり、幅約300cm・深さ約70cmある。黒褐色細砂層・黄褐色粘土層が堆積する。遺物は極めて少ないが、平安時代前期（京都 期新）の土師器・瓦および木製品（箸）が出土した。

3区（11.5×2.5m・約29m²・39.3m・豊楽院跡）

基本的な層序は、現代積土層が厚さ約0.5～0.6m、焼土・炭を含む黒褐色泥砂層が厚さ約0.1m、耕作土層（黒褐色砂泥）が厚さ約0.4m堆積し、土取穴上面となる。土取穴は調査区ほぼ全面に展開し、東端の地山の高まりで途切れる。土取穴内には褐色砂泥層・オリーブ褐色粘土層・黒色砂泥層などが堆積し、上面から130～160cmで地山に至る。地山は、上から黄褐色粘土層・黄褐色粗砂層・オリーブ褐色粗砂層が堆積し、黄褐色粘土層が土取の対象となった土層であろう。

検出した遺構には、土取穴がある。土取穴の上面は、暗灰黄色砂泥層・黒褐色粘土層などで15～20cmほどの厚さで整地している。これら整地土層は緻密な土層で、平安時代の瓦を包含してい

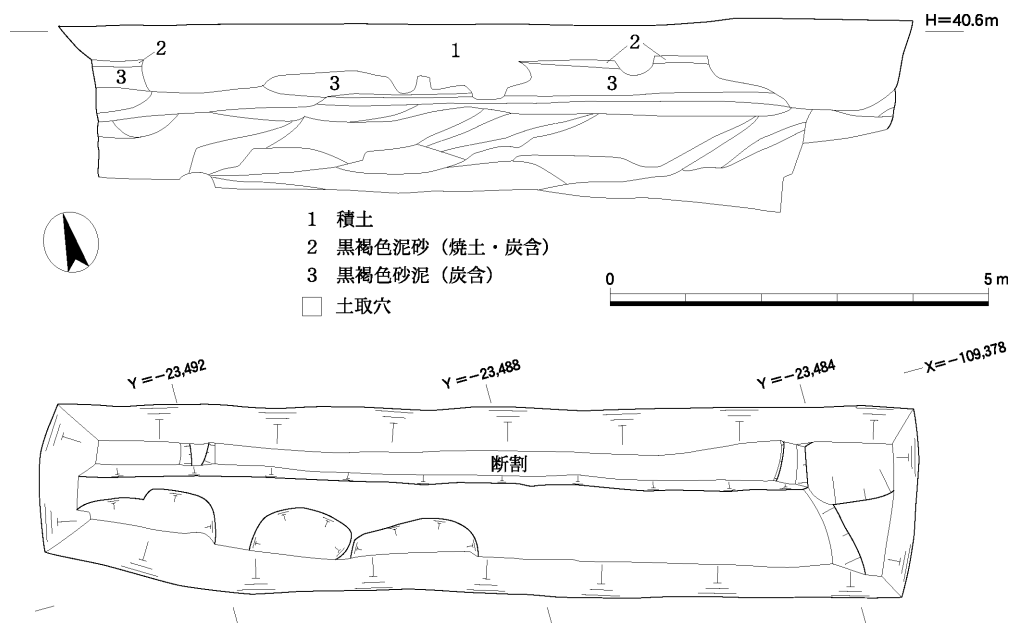


図6 3区実測図（1：100）

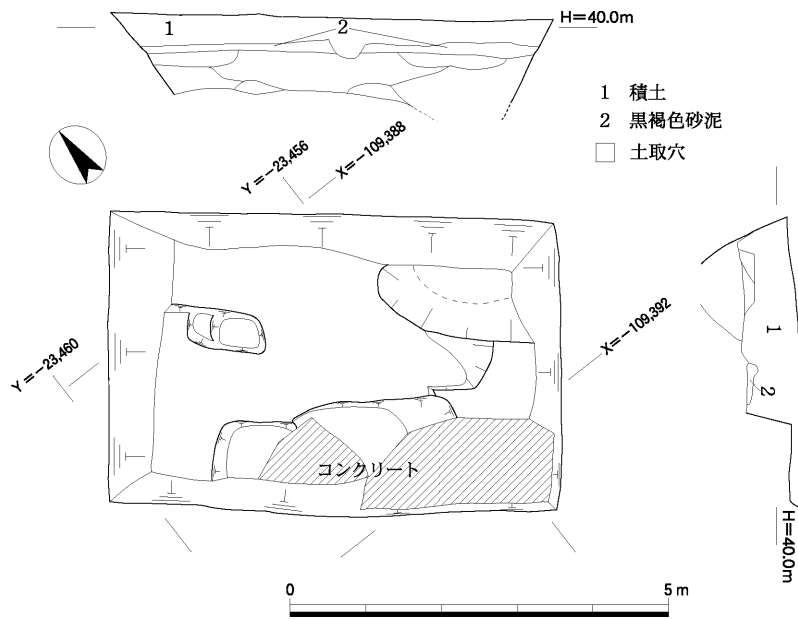


図7 4区実測図(1:100)

たため、当初、平安時代の整地土層ではないかと想定し、調査を進めていたが、調査途中で江戸時代の土器類が出土したことから、調査区全面が江戸時代の土取穴であることが判明した。この江戸時代の整地土層には、平安時代の瓦が多数包含されていること、土層が緻密であることから、当該地に遺存していた平安時

代の遺構などが削平を受けたものと考えられる。従って、調査方法を変更し北壁に沿って断割を行い、土取穴の状況の把握および土取穴底面の地山面での遺構の有無の確認を行うことにした。断割の結果、土取穴の底面で1箇所高まりを検出した。この高まりは、土取穴東端の地山の高まりから約8m西に位置し、土取り作業に伴う作業単位の可能性があると考えている。断面観察から、土取穴内は東側から順に埋め戻し、上面を整地したことが判明した。土取穴からは江戸時代の土器類・平安時代の瓦類が出土した。

4区(約6×約4m・約24㎡・39.4m・豊楽院跡)

基本的な層序は、積土層が厚さ0.4~0.6m、耕作土層(黒褐色砂泥)が0.15m堆積し、土取穴の上面となる。土取穴内は黒褐色砂泥層・灰黄褐色砂泥層・暗灰黄色砂泥層などが堆積し、上面から約0.5mで地山に至る。地山は、上から黄褐色粘土層・オリーブ褐色粘土層・にぶい黄褐色砂礫が堆積し、黄褐色粘土層・オリーブ褐色粘土層が土取りの対象となった土層であろう。

検出した遺構には、土取穴がある。土取穴は調査区全面にあり、東端で僅かに地山が高まる。土取穴内には、3区の土取穴のような連続した埋め戻し状況は見られない。

表1 遺構概要表

時 期		遺 構			
		1 区	2 区	3 区	4 区
平安時代	期	土壌1・2	土壌1、土取穴		
室町時代	~ 期		溝1・2、柱穴1、土取穴		
江戸時代		土取穴	土取穴	土取穴	土取穴

(2) 立会調査

埋設管敷設工事による掘削規模は、幅1.2m、深さ1.5mあり、敷設工事は北接する隣地境界から3～4mの間隔を置いて下ノ森通側から西へ順次実施された。当該地の地形は、西へ緩やかに傾斜する。基本的な層序は、積土下は近代の土層が1～0.5m堆積し、直下が地山となる。遺構は地山上面で検出した。以下、遺構の概要ならびに検出地点の地山の状況などを述べる。

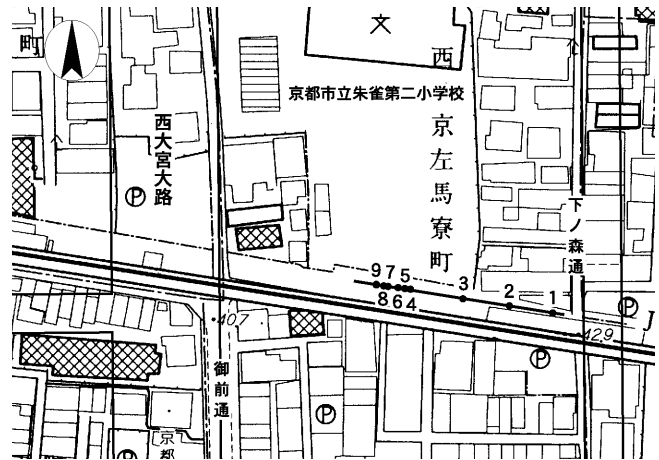


図8 立会調査遺構検出地点位置図(1:2,500)

地点1(Y=-23,704付近)での地山は上から灰黄色粘土(2.5Y6/2)層・黒褐色粘土(2.5Y3/1)層・灰色粗砂(7.5Y6/1)層・褐色粗砂～粘土(10YR4/6)層などが堆積しており、氾濫堆積を呈し、軟弱な土層である。この傾向は調査箇所全体にみられる。

地点2(Y=-23,715付近)では現地地表下0.7mで土壌1を検出した。長さ320cm・深さ20cmあり、瓦2片、土師器細片1片が出土したが、時期は不明。地山は灰オリーブ色粘土(5Y5/2)層・黄褐色粘土(10YR5/8砂礫含)層などが堆積する。

地点3(Y=-23,734付近)では現地地表下0.9mで土壌2を検出した。長さ38cm・深さ18cm、灰色粘土(5Y4/1)層が堆積する。遺物は出土せず、時期は不明。地山は灰色砂礫+粘土(7.5Y4/1)層、褐色粘土+粗砂(10YR4/6)層が堆積する。

地点4(Y=-23,750付近)では現地地表下約0.6mで土壌3を検出した。長さ48cm・深さ30cm、黒褐色粘土(10YR3/1)層が堆積する。遺物は出土せず、時期は不明。

地点5(Y=-23,752付近)では現地地表下約0.6mで土壌4を検出、長さ80cm・深さ22cm、黒褐色砂泥(2.5Y3/1)層が堆積する。土師器片が出土したが、時期は不明。

地点6(Y=-23,754付近)では現地地表下0.6mで柱穴1を検出した。長さ32cm・深さ34cm、黄灰色粘土(2.5Y4/1)層が堆積する。遺物は出土せず、時期は不明。

地点7(Y=-23,758付近)では現地地表下0.6mで土壌5を検出した。長さ45cm・深さ16cm、黒褐色粘土(7.5YR3/2、炭含)層が堆積する。遺物は出土せず、時期は不明であるが、落ち着いた土層で古い遺構と考えられる。

地点8(Y=-23,759付近)では現地地表下0.5mで柱穴2を検出した。長さ23cm・深さ20cm、褐灰色粘土(10YR4/1砂礫含)層が堆積する。幅8cm・高さ11cmの根石がある。遺物は出土せず、時期は不明。

地点9(Y=-23,761付近)では現地地表下0.5mで土壌6を検出、長さ55cm・深さ20cm、褐灰色粘土(10YR4/1)層が堆積する。遺物は出土せず、時期は不明である。

4. 遺物

今回の調査で遺物総数で10箱出土した。これまでに判明した遺物内容について下記に示す。

平安時代の遺物には、土器類・瓦類・木製品・石製品がある。

土器類には、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器などがある。このうち、図9 - 1は、2区の平安時代前期の

土取穴から出土した土師器皿で、「京都 期新」頃に属する。口径17.0cm・高さ2.0cmある。同時期の土器は2区の土壌1、室町時代以前や江戸時代の土取穴などから出土した。

瓦類には、丸瓦・平瓦がある。1～4区の大半の遺構から出土した。

木製品には、箸が1個体ある。図9 - 2は、一端は折れるが、一端は切り落として面を有する。形状は、先端で僅かに細くなるが、棒状を呈する。外面のケズリ調整は中寄りで6～7回前後、先端で5回前後施す。現存長12.1cm。径は端で0.4cm、中寄りで0.5cmある。

石製品には凝灰岩がある。破片が3個出土した。2個は面取りの加工痕がそれぞれ2面遺存しており、形状から同一個体と考えられるが、接合できない。2面の角度はほぼ直角で、断面形を（長）方形に面取りした部材の破片と言える。大型の破片の現存規模は、21.2cm×19cm×11.9cm、小型の破片の現存規模は18.7cm×8.1cm×7.2cmある。他の破片の表面は、磨滅が激しい。平坦面は僅かに確認できるが、加工痕は遺存していない。現存規模は、33.5cm×33.2cm×14.3cmある。

室町時代の遺物には、土器類がある。土器類では土師器がある。

江戸時代の遺物には、土器類・瓦類がある。

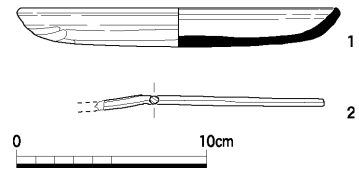


図9 2区土取穴4出土遺物
実測図（1：4）

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代前期	土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器	5箱	土師器1点	0箱	4箱
	丸瓦・平瓦			0箱	
	箸		箸1点	0箱	
	凝灰岩	1箱		0箱	1箱
平安時代中期から後期	丸瓦・平瓦	4箱		0箱	4箱
室町時代後期	土師器・陶器	1箱		0箱	1箱
江戸時代	土師器・陶器・磁器			0箱	
計		11箱	2点（1箱）	0箱	10箱

5.まとめ

今回の調査では、多くの調査成果を上げることができた。

まず、御井跡で検出した平安時代前期の土取穴と考えられる土取穴4・5は、今回の調査で検出した中で重要な遺構の一つである。

御井は豊楽院の西に位置し、天皇に水を供することを職掌とする役所で、天長7(830)年には、御井の敷地の南半分が中務省厨として割譲される。2区は御井南北中心の北側に位置しており、御井として存続した区域と考えられる。土取穴4は、御井東築地心想定線から西に約2.4mに位置し、東面築地に近接した箇所であり、御井の造営時に利用された土取穴と考えられる。また、この土取穴4の断面形状は、底面・側面が直線的であり、その後の土取穴とは形状も異なることが判明した。

一方、江戸時代の土取穴は3・4区で顕著に見られる。これは、土取りの対象である聚楽土の広がりに関連する。2区は既に平安時代には土取りが行われていたため、結果として江戸時代の土取りが行われなかったと考えられる。今回の調査区は幅が狭いなど制約が伴ったが、3区では、土取穴の底面で地山の高まりを1箇所検出することができた。この高まりは、土取穴東端から約8m西に位置する。内酒殿跡の調査⁵⁾では、大・中・小の土取区画が検出されており、大区画は6~4mあったことが判明している。今回の高まりが区画施設であれば、それよりもやや大型の土取区画の単位である可能性も考えられる。

以上のように、狭小な面積の調査であったが多くの調査成果を得ることができた。小規模な調査も成果を積み重ねることによって、平安宮の構造やその後の変遷も解明できると考えている。

註

- 1) 『平安宮』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 2) 辻 裕司・近藤知子「平安宮左馬寮跡」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 3) 平田 泰・小檜山一良「平安宮・平安京右京一条三・四坊・二条二・三坊・三条一坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 4) 出土土器の編年の型式は以下の編年案に依る。なお、「平安京 ~ 期」「京都 ~ 戴期」を「京都 ~ 戴期」で統一した。
小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 5) 辻 裕司・丸川義広・大立目 一「平安宮内酒殿・釜所・侍従所跡」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきゅうさまりょう・みい・ぶらくいんあと							
書 名	平安宮左馬寮・御井・豊楽院跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2001-5							
編著者名	辻 裕司							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2002年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきゅうさまりょう・ 平安宮左馬寮・ みい・ぶらくいんあと 御井・豊楽院跡	きょうとしながぎょう 京都市中京	26100		35度 00分 50秒	135度 44分 40秒	2001年6月 18日～2001 年7月26日	132.5m ² 86m ²	道路敷設
	くにしのきょうさ 区西ノ京左 まりょうちょう 馬寮町					2001年10月 19日～2001 年10月26日		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安宮左馬寮・ 御井・豊楽院跡	都城	平安時代前期	土塋・土取穴	土師器・須恵器・黒色 土器・緑釉陶器・灰釉 陶器・丸瓦・平瓦・木 製品・凝灰岩		平安宮御井跡で平 安時代前期の土取 穴を検出した。		
		室町時代後期	整地土層・溝・ 柱穴	土師器				
		江戸時代	土取穴	土師器・陶器・磁器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-5
平安宮左馬寮・御井・豊楽院跡

発行日 2002年9月30日

編集行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961